

原爆文学研究会報

第一九号

原爆文学研究会 二〇〇六年九月

「断絶」する世代 戦前生まれと戦後生まれとの「断絶」が叫ばれるようになって久しい。例えば戦後一年の時点で、既に次のような報告がある。「平和教育といいますがね、もういまの子どもたちは戦争を知りませんよ、戦後生まれた子どもが四年生、五年生ですからね。」「時々私が教室で私自身の過去を、苦しみと悲しみといきどおりとで語るとき、多くの生徒の目にあらわれるものは、同じ感動ではなく、むしろ珍しいものへの好奇心と、ある種の単純な笑いであるということが、そういう私の不安を一層大きくさせる……」（日高六郎「戦争体験と戦後体験——世代の中の断絶と連続——」（「世界」一九五六年八月において紹介されている小中学校教員の言葉より）。現在もよくとりただされる戦争体験者と非体験者との「断絶」の構図は、この頃には既に成立していたようである。

戦争体験談に対して、何の感動も示さず、むしろ好奇の目や笑い、あるいは無関心でしか応えない戦後世代を叱りとばすのは簡単なことである。しかし、それによって共感が生まれるとは考えにくい。日高六郎は引用文の中で、「世代論がおちいる最大の危険は、階級その他さまざまの要因で起こってくる、社会的対立や差別を、世代という概念で、一色にぬりつぶしてしまうところにある」と指摘している。同感だ。そもそも小中学生に求めるべきリ・アクションはど

うあるべきなのか、というところから、慎重に問い直してみる必要があると思うのだが。いかがだろうか。（中野和典）

第一九回 原爆文学研究会報告

二〇〇六年七月二五日（土）九州大学六本松キャンパス開催した「第一九回原爆文学研究会」には約二〇名が参加。

亀井氏の発表については、「侵略戦争という言葉は戦時中に発し得たのか、また、侵略という割には弁護しているのではないか」「リアリティをめぐる言説が、その後の「夕風の街——」にながっていったとは考えられないか」等の質疑がありました。

長野氏の発表については、「いつ頃、天皇は科学者と目されるようになったのか」「科学を中立的なものとして語ることで自分が政治的であると言えるのではないか」等の質疑がありました。



◇ 研究発表表¹

原爆と恋愛

——大田洋子「人間檻樓」の行方から検討する——

亀井 千明

「人間檻樓」（昭和25年8月〜昭和26年8月、『改造』『世界』『人間』各誌に分載）に対する現在に至るまでの批評の内実は、ある一定の傾向を持っている。内実としては昭和25年度版「屍の街」の序で宣言した（被爆の文学化）を実現した作品と見なされる一方、その文学的試みは決して成功しているものではないという。それは、原爆文学とはリアリテイやヒューマニティーの側面こそ評価すべき価値を持つのであり、「人間檻樓」における文学的要素は否定されるしかないという意味も含んでいる。この文学的要素とは、具体的には中国体験の部分を含む敏子という女性を巡る恋愛物語を指す。更には「流離の岸」といった戦前の大田の自伝的恋愛小説の単なる再現という否定的な指摘や、敏子に大田を見立て、自己満足の恋愛劇だと大田自身を非難するような向きもある。本発表では、原爆文学にリアリテイやヒューマニティーを追求する批評群に対して、むしろ敏子の恋愛物語を中心とした文学的要素を用いて大田が実現しようとした原爆文学について、テキスト分析を中心としながら考えることにした。

テキストを分析する時、批評群が共感出来なかった敏子の脱力感や虚無的なさまは、梅原との恋愛の破局や、杉太たちの妥協した結婚への反

発など、敏子の恋愛観念と深く繋がっていることが分かる。更にはそこに中国体験も結び付いてくる。中国における日本側の加害を体感した敏子は、周囲が復興へと向かう中、その当時の記憶を持ち続けながら戦後を生きている。以前拙稿で論じた昭和23年版から25年版の「屍の街」改稿問題（『原爆文学研究 第4号』収録）にも表れているが、大田は被爆の事実の深刻さを昭和20年8月6日当時だけで捉えてはいない。「人間檻樓」もまた、被爆その後の問題を扱った作品である。梅原たちを始めたとし、戦時を過ぎたものとして被爆から戦後の復興を志向する群像の中で、戦中の記憶を引き摺りながら一人佇んでいる敏子を中心とした物語と読み解くことが出来る。それは大田が集団心理よりも、見落とされがちな被爆後の一人の人間の心理にこそ目を向けたといえる。つまりヒロシマの一つの被爆後／戦後について、恋愛要素を織り交ぜながら文学化し得たのである。

7月の研究発表時では結論が分散してしまった観があるが、以上述べてきた意味で「人間檻樓」を再評価できればと思う。そして批評群が向けてくる原爆文学に対する期待に、必ず作品は応えるべきなのかという問題についても、この作品は示唆してくれる。

科学としての原爆

長野 秀樹

「原爆」について語ろうとする時、私たちはどういふ視点から語るのだろうか。例えば「被害としての原爆」を語ろうとする視点と「威力としての原爆」を語ろうとする視点は、昭和20年8月6日と8月9日のヒロシマ・ナガサキを語ったとしても、その姿勢は180度異なると言えるだろうし、「信仰としての原爆」、「産業としての原爆」といふ視点も存在するだろう。そうした様々な視点の中で「科学としての原爆」といふ視点は、敗戦の原因をアメリカと日本の科学技術力の差に求めようとする風潮などとも関連しながら、戦後の様々な原爆観の中で、一定の影響力を国民に対して持っていたように思われる。

例えば、昭和21年10月号の「主婦の友」に掲載された嵯峨根遼吉「戦争を超えて―原子爆弾と共に投下されたわが友の手紙―」は東京帝国大学教授（当時）であり、実験物理学者である嵯峨根遼吉に宛てた書簡が、長崎原爆の「威力」を確認するために、直後に投下された短波発信器に同封されていたという事実を告げている。「大東亜戦争」開戦前に、アメリカで実験物理の研究を行っていた嵯峨根に対して、当時の学友がこの爆弾が原子爆弾であることを伝え、「日本が即時降伏しないならば、この原子爆弾の雨はますます猛威を加

へる」ことを忠告している。これがそのキャプションにいうように「科学者の国際友愛秘話」なのか、手持ちの原爆をすべて使い切つたにも関わらず、なおも原爆を保有しているかと思せかけようとするアメリカのはたたりであるのかは、しばらく措くとしても、この手紙の受信者である嵯峨根がこの手紙を「利用」しながら「架空の必勝論をかざして、厳然たる科学の現実に耳をかさぬ軍人を前に、原子核研究者としての私は幾度臍をかんだことであろう」という文章に見られるように、科学者としての視点から、科学の成果としての原爆を語ろうとしていることは間違いない。

また、嵯峨根は昭和20年10月30日には『原子爆弾』（朝日新聞社）を刊行し、一部、ドイツが既にソ連に対する原爆攻撃を行っていたとする風評部分が検閲で削除された（堀場清子『原爆 表現と検閲』朝日新聞社、平8・8）のみで、原爆の原理やその製造方法までも公にしている。これに先立って、原爆に関する著作としては武井武夫『原子爆弾』（同盟通信社、昭20・9・20）があり、こちらはその仕事を利用して、外信をうまく利用する形で原爆について語り、検閲による削除を受けない形で刊行されたのではないかと推測される。これらの著作はいわば、当時検閲の対象となつたのが、先に述べた「被害としての原爆」のみで、「科学としての原爆」は対象外であったことを物語ると同時に、科学の成果としての原爆を強調するGHQの意図が「被害としての原爆」から日本国民の目を逸らせる働きを持っていたことを感じさせるのである。

彙報

第一九回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇六年七月一五日（土） 一四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号室
- 内容 研究発表

原爆と恋愛

—— 大田洋子「人間檻樓」の行方から検討する ——

亀井 千明

科学としての原爆

長野 秀樹

第二〇回原爆文学研究会の延期について

二〇〇六年九月に開催を予定しておりましたが、第二〇回原爆文学研究会は、発表者が二名そろわなかったため、一二月に延期することになりました。

本研究会は、二〇〇一年一二月の創設以来、年四回の研究会（発表者二名）の開催と会報の発行、年一回の機関誌の発行を原則として活動を進めてまいりました。しかし、今回は、発表者が規定数二名に達しないという事態になりました（お一人はお引き受けいただけいておりました）。変則的に研究発表を一つにして、代わりに座談会を、という案もあったのですが、会期の原則を崩したくないだけの

会は開催するべきではないという判断から、最終的には事務局の方で会の延期を決定いたしました。

発表者の募集とスケジュール調整について事務局に反省すべき点が多くあったことを深くお詫び申し上げます。会員諸氏には、今後、より積極的な会への参加をお願いいたします。これから、第二〇回以降の研究会に向けて、責任の重さを感じつつ、事務の仕事を進めてまいりますので、より一層のご助力をよろしくお願いいたします。

（事務局一同）

編集後記

「原爆文学研究」第五号の編集作業を進めています。一二月に延期することにした研究会の代わり、というわけではないのですが、九月中には発行予定です。ご期待下さい。

（N）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一一六五二〇 福岡市中央区六本松四一一一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>